

水上勉

文章修業



瀬戸内寂聴

岩波書店

水 上 勉
文章 修業 學院 圖書館
瀬戸 内 蘇 上 蔵
聴

岩波書店

文章修業

1997 年 7 月 25 日 第 1 刷発行

著 者 みずかみ つとむ 水上 勉 せ とうちやくちよう 瀬戸内寂聴

発行者 大塚信一

発行所 株式会社 岩波書店

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電 話 案内 03-5210-4000

印刷・法令印刷 カバー・精興社 製本・松岳社

© Tsutomu Mizukami and Jakuchō Setouchi 1997
ISBN4-00-002872-3 Printed in Japan

まえがき——ふたりの暦

瀬戸内寂聴

水上勉さんとのつきあいの長さを思うと、ふたりとも、よくぞ生きてきたなあという感慨が先だつ。今や七十八歳と七十五歳のれっきとした老境に入った筈のふたりなのに、今度はじめて、こんなに長時間話し合える好機会を恵まれ、存分に対話してみても愕いたことは、お互い、全く精神の老いを感じなかったということである。

はじめてお会いしたふたりの三十代終りの頃から見ると、水上さんの男前は、渋さを加えて相変らず魅力的だった。度重なる重い御病気をされたに関わらず、不死鳥のように甦られた肉体は、まだしゃんとしていて、むしろ若い頃より肉づきよく、恰幅が出ていた。何より、若い時のフェロモンを撒き散らし、女たちに否応なく囲まれて

いた頃の、男臭い魅力は洗い流されて、その容貌はおだやかな慈眼をたたえた名僧のようになっていた。このまま紫衣をまともらつても、そこらの高僧といわれる方々より、立派に見えるだろう。私の方は、髪を落し、好んで着ていた派手な和服が墨染の緇衣しえと変っているが、脚腰達者で、立居振舞にはこと欠かない。四十五歳の超多忙の男性のスケジュールよりもっと過密なスケジュールを、七十五歳の女の身で日々こなしている。と、ここでふたりの肉体の自慢をしても、実はやはり「さかさまに行かぬ年月よ」という光源氏の述懐は確かで、死の支度は確実に肉体の内部で日々進められているのである。

けれども「こころ」は、どうしてこうも老いなのであろうか。人間の老いの不幸というのは、いつまでも若いところが、確実に年と共に古び、もろくなっていく、からだに包まれているという不条理から生れるのかもしれない。わが胸の中を覗いてみると、こころは、十七、八のままの感動や好奇心や情熱を、そのまま持ちつづけているのに呆れ驚く。

水上さんと話していて、水上さんの中にも、同じことを感じておかしくなった。

私たちは互いに忙しく暮らして、長い歳月に数えるほどしか逢っていない。ふたりきりで話したのは、こういう対談の終りに、ちょっとふたりで残って話した機会しかない。

それなのに、なぜか、私はその度、水上さんが決して他人には話されてはいないと信じる重大なことばかりを聞かされている。もしかしたら、水上さんはそれを忘れていられるのかもしれないと思うけれど、私はしっかりとそれらの話を心の中縫いこめてある。いつでもそういう話の時の水上さんの顔は苦渋に満ちていて、ある時は、泪の滲んだ目さえ見せていた。私は聞くだけで、何も答えられなかった。そういう種類の重い話ばかりであった。

出家の前、私が水上さんにそれを告げたのは、そういう重い切ない心情を洩らす相手に選んでくれた、水上さんに対する私の感謝からであった。

幸か不幸か、ふたりの間に色事は皆無であった。この対談からそれは伝わるであろう。今となっては惜しむべきことか。呵々。

対談の中で水上さんは「暦」という言葉をよく使われた。その使い方が美しく、心

にしみた。ふたりの暦はたしかに重なりあう面が多かった。その暦の中で一際美しい光りをたたえた時間があつたのに、そのことをこの長い対談の中で外してしまっている。惜しいのでここに書いておく。

水上さんは生れ故郷の若狭に「一滴文庫」という立派な記念館を私費でお建てになっている。車椅子で全館を廻られる配慮がほどこされた建築で、堂々としながら、瀟洒な白亜の建物である。

横に、竹紙漉きの小さい工場と、竹人形の上演される芝居小屋も建っている。文庫には、水上さんの生原稿はじめ、水上文学に関するすべてのものが集められ展覧されている。この場所こそ、水上ランドとして、水上勉のすべてのモニュメントとして後世に伝わる聖域である。

「これを建てるため、十年間、あらゆる浮世の義理を欠いて、また借金一杯背負いこんだ」

と、水上さんは苦でもないように笑って話しておられた。私はここで竹紙を自分で漉かしてもらい、その紙に仏さまの絵を描かせてもらった。

水上さんはその一滴文庫の中に、あの美しい字で黒々と、ふるさとの子供たちへのメッセージを書き遺している。私と同じ放浪の星を背負う水上勉さんの、ふるさとへの切ない愛と、作家水上勉の限りないやさしさと哀しさが、その中にあふれていた。

たった一人の少年に

ぼくはこの村に生まれたけれど、

十才で京都へ出たので、

村の小学校も卒業していない。

家には電燈もなかったので、本もよめなかった。

ところが諸所を転々して、

好きな文学の道に入って、本をよむことが出来、

人生や夢を拾った。

どうやら作家になれたのも、本のおかげだった。

ところが、このたび、所蔵本が多くなって、

どこかに書庫を考えたが、

生まれた村に小さな図書館を建てて、

ぼくと同じように本をよみたくても買えない少年に
開放することにきめた。

大半はぼくが買った本ばかりだ。

ひとり占めしてくさらせるのも勿体ない。

本は多くの人によまれた方がいい。

どうか、君も、この中の一冊から、何かを拾って、

君の人生を切りひらいてくれたまえ。

たった一人の君に開放する。

文章修業
目次

まえがき——ふたりの暦・……瀬戸内寂聴・……i

第一章 先人の径をたどって・……i

同じ時代に生きてきた 3

悠々自適で遊戯三昧 8

最後のぜいたくな人 II

仕事に径を教えられる 17

小林秀雄さんのこと 23

里見弴さんのこと 33

この時間があるから…… 37

第二章 長生きもいいな・……45

浮名もうけ 47

郷愁の巻煙草 51

九十の恋 54

失恋と得恋 62

恋愛の究極 67

第三章 野垂れ死に願望・・・・・・・・・・・・73

もうひとりの自分を呼んでくれる 75

禅宗と色事と問答 82

今東光さんと川端康成さん 89

小説家は嘘つき 95

みんな土に還る 100

野良犬として生きて 108

第四章 物書きとしての出発・・・・・・・・・・・・・・・・115

はじめての投稿 117

編集者が書かせてくれる 124

芸道の世界 127

虚実ないまぜ 131

文学少女からの出発 141

語りの大家 150

第五章 文章道を語る・・・・・・・・・・・・・・・・155

文章のリズム 157

『源氏物語』を書く 167

文章のしんどさ 177

売れる売れない 183

目 次

何で書くのか	186
削いで削いで削ぎ落とす	192
小説はどうなるのか	198
あとがき	205

装幀	多田 進
版画	多田 順

第二章

先人の徑をたどって

同じ時代に生きてきた

水上 わたしはとうとう宇野浩二先生よりも年をとってしまいましたよ。

瀬戸内 みんな、あっちへ往きましたね。『文芸年鑑』のうしろのほうに、亡くなった人の名簿がありますね。この間、あれを見ながら、わたしがものを書きだしてから、一度でも会ったことのある作家で亡くなった人は何人あるかって数えた。もう百人をこえていますよ。

水上 百人をこえていますか。わたしもお会いするので、昔のことをいろいろ思い出しておりますけれども、わたしがいちばん鮮明なのは、お忘れかもわからないけど、出家なさる前の、三日か五日ぐらい前です、みちのくへ行かれる前でした。銀座の浜作でなにかの会がございまして、「ちょっと水上さん、ここ行かない」って、瀬戸内さんが喫茶店へわたしを連れて行くんですよ。